



# ほほえみ



↑人権教育係のホームページ



令和3年度全国中学生人権作文コンテスト栃木県大会 優良賞受賞作品

## 「可哀想」は必要か 小山市立大谷中学校 3年 安田 凱

一年前のことだ。僕は学習塾に行くためにバスに乗った。座席に座ると、目の前の女性が赤色の白の十字架とハートのついたキーホルダーのようなものをリュックサックに提げているのが目に入った。このマークは一体何を表しているのだろうか。しかし、そのマークの意味を知らなかった僕にもあのマークは周囲の人に何か大切なことを訴えかけていることだけは悟ることができた。

その夜、僕はパソコンで、車内で見かけたあのマークについて検索してみた。調べてみると、それは「ヘルプマーク」というものだとなった。ヘルプマークとは、援助や配慮が必要としている方々が、そのことを周囲に知らせるためのマークであるらしい。例えば、義足や人工関節を使用している方々、精神的な障がいを抱えている方々、それから妊娠中の女性などが主に使用していることだ。このマークについて詳しく調べた後、もう一度あの女性を思い出してみると彼女は杖をついていたわけでもなく、健常者に見えた。その時、僕ははっとした。周囲には気付かれにくい病気などを抱えている方々がそれを知らせるマークなのだ。

それから数週間が経ったある日、僕は再びバスに乗った。すると、あの時の女性と同じヘルプマークを提げた男性がいることに気が付いたのだ。その時、バスは非常に混み合っており、その男性は立つことを余儀なくされていた。ヘルプマークの存在について詳しく知ったその時から、今度そのような場面に遭遇したら自分にできることを探して実践してみようと考えていた。僕は、その男性に席を譲ることにした。心の中で想像することは容易だが、実際に話しかけてみると緊張した。僕は勇気を出して、

「席をお譲りします。」

と、声をかけた。すると男性は、

「ありがとうございます。このマークの存在に気付いてくれたのですか。」

と、やや驚いた表情で質問してきた。僕が、

「はい。ヘルプマークについて調べたことがあるのです。」

と、答えると、男性は少しうつむいて、

「実は、このマークの存在に気付いて援助してもらったのは、今日が初めての経験なのです。今まで何度も混雑したバスや電車に乗りましたが、誰にも手を差し伸べてもらえなかったのです。」

と、小さな声で悲しそうに言った。席を譲ったことを感謝され、うれしい気持ちもあったがその反面、これが現実であるということを知った僕はその男性と同じように悲しい気持ちにもなった。知り合った男性は比較的若く、最初に出会った女性と同じように障がいを持っているようには全く見えない。しかし、ヘルプマークを提げているにも関わらず今まで一度も助けてもらった経験がな



ヘルプマークについて(小山市HP)

いという事実に僕はとても驚いた。そしてこの社会は、障がいを抱える人々に冷たすぎると痛感した。

この出来事があったから、僕は障がいのある方々について考えることが増えた。

僕には足が不自由で、車いすでの生活を送っている親戚のおじさんがいる。そのおじさんは日常生活のほぼ全てを車いすで過ごしている。去年の夏休み、おじさんの家を訪ねた時、僕はそのおじさんの介護を少し手伝った。例えば、トイレに行く際、車いすから体をおこす作業は想像以上に大変で辛かった。これを毎日繰り返す。もしも僕が普段介護しているおばさんだったら、介護することを投げ出してしまうかもしれない。僕はおじさんから離れたところでおばさんに尋ねた。

「おじさんは可哀想だと思うけれど、介護が嫌になったりしないの。」

するとおばさんは、

「確かに介護は大変で、たくさんの苦勞を伴う。でも、私は主人のことが可哀想だと思っていないよ。それに私も支えてもらっているの。」

と、笑顔で語っていた。

あれから僕は、おばさんの言葉を思い出して何度も考える。足が不自由なおじさんは可哀想ではないのか。そして、以前僕がバスで出会ったあのヘルプマークを付けた方々は本当に可哀想な人なのか。可哀想に思ったから僕は男性を助けたのか。いろいろな考えが心に浮かんでくる。だがはっきりと言えることがある。それは、障がいを抱える方々にとって今の社会が住みやすいとは決して言えないということだ。僕は更に考える。どんな社会が障がい者にも健常者にも住みやすいのだろうか。互いがより理解しあい助け合う社会。互いを認め合い、共に人生を支え合う社会。それ以上に、「障がい者」と「健常者」という言葉の差別さえなく、互いにすぐに手を差し伸べ合う。そんな社会が理想なのかもしれない。そして、可哀想という気持ちが、理想の社会に存在した方が良いのか、それとも悪いのかは今も解らない。

【出典：宇都宮地方方法務局・栃木県人権擁護委員連合会主催 令和3年度全国中学生人権作文コンテスト栃木県大会入賞作文集】



## 第2回小山市いじめ等防止市民会議に寄せられた委員からのご意見



### 「ネットいじめ」をなくすために、我々大人ができること、しなければならないこと

子どもが見ているのは周囲の大人の行動です。自分は子どもたちから見られていることを心に留めておかなければと思います。発言の自由、行動の自由と身勝手は違うということを考えてほしいし、子どもにも伝えていきたいです。



ネットトラブルの危険を教えたり、時間を決めたりとステップを踏んで使わせる必要があると思います。そして、親子でルールを決め、子どもに任せっきりせず声を掛け続けコミュニケーションを怠らないことが大切だと思います。

大人自身もリテラシー教育に参加できる機会を何度も設け、参加すべきだと考えます。子どもに教育すべき大人の方が、ネットマナーが悪いのではないのでしょうか。相手を思いやることはもちろん、受け手としても相手の気持ちをプラスの方向に読み取る技術を身につけることが必要であると思います。

「いじめは絶対に許されない」という強い信念を持ちつつ、加害の子ども被害の子ども、周りの子ども含めた子どもたちが置かれた辛い状況をまず理解し、その辛さに共感し、一緒に解決の道を探すことではないかと思います。また、辛い状況は大人の社会の影響を受けていることを自覚しその辛さを取り除く努力が必要です。



私は～だと思うけど、どう思う？

本紙の内容や感想をご家庭で話題にしてみませんか？